

報



會

會 岳 山 本 日

81

月 一 十 年 三 十 和 昭

西歐山岳文獻の
翻譯

藤 島 敏 男

巴里のセーヌ河畔に程遠くないセーヌ街の六番地に、山岳圖書専門の書肆を探してあてたのは、私が巴里に着いて西郊ヌイーに寓居を定めて間もなくであつた、店のあるじは年の頃四十前後の、いかにも山登りでもやりさうなしつかりとした體格の持主で、古書の塵にまみれてゐる柄とは見受けられない仁であつたが、その後別懇になつて、話をきいてみると、ドウワイネ・アルプスやモン・ブラン附近はもとより、スイスも目星しい大物の、しかも一筋縄ではないかないうな悪場も一通りは登つてゐるといふ、佛蘭西山岳會でも一寸名の通つたメンバーと判つて、さては好む道の道樂商賣かと、うなづいた譯である。夏は二ヶ月、冬も一週間十日、と店は閉め切りで、通りかゝつたついでに飾窓から奥を覗いてみると、氷雪の世界を駆け廻つてゐる主人公の留守を、山の本が承つてゐるばかり、呼べど敵けど返事がないといった具合。まづたく陸張りとしたものだ。こんなふうだから店へ本を素見しにいつても、訪れるのは、主人公の山仲間が油を賣りに立寄つてゆく位のもので、殆んど本の賣れるのを見たためしがない。それでゐて、大將はいつも泰然と構へて、私

の額をみると、音樂會の話やら、芝居の話やら、さては山の話と、商賣をそつちのけにして話がづむ。別に本を押付けるでもなし、こちらを押賣られるほどの弱氣でもないから暇なときには、河岸の散歩の折によく這入り込んで、棚にギツシリ詰つた山の本を一冊々取りだして眺めながら、あるじアンドレ・ワールの話をきいたものである。このワール書店の本棚で英佛獨伊の山岳文獻——といつても、大部分はフランス語のものであるが——を眺めたり手にとつたりしてゐる内に、少しばかりは山の本を買ひこみしたが、いまこゝで私が取り上げやうとするのは外國山岳文獻の佛蘭西語に翻譯されてゐるものが案外多いのに氣付いたことである。

まづ古むところから挙げれば、アルバイン・ジャナルの前身ともいふべき「峰、峠、氷河」三巻の抄譯がある。續いてウインバーの「アルプス登攀記」は夙に一八七三年に佛譯が刊行され、同じ著者の筆になるシヤモニー、ツエルマツトの案内書も佛譯されてゐる。

マンメリーの遺著は一九〇三年に翻譯され、一昨一九三六年には新版が出て久しく絶版となつてゐたこの名著が若い人々の手に送られた。年代は詳らかでないが、コンウエイの「カラコラム・ヒマラヤ」も抄譯がある。クリーツチの「自然と歴史に現はれたるアルプス」は一九一三年に完譯され、ギド・レイのものは「マツターホルン」、「アルビニスム・アクトロパティク」をはじめ「アルプスの曙」及び隨筆集がいくれも佛語になつてゐる。その他、フレツシュフ・イールドとモンタニエの共著「ド・ソウシュニール傳」、アブルヂ公の「ルウエンゾリ登攀記」、第一回乃至第三回の「エヴェレスト遠征記」三巻、フインチの「メーキング・オブ・マウンテンヤ」、ギド・ランメル「ユングボーン」などが佛譯されてゐる。

近年に至つて、スマイスの「カンチエンジャンガ・アドヴェンチュア」、アーヴィングの「ロマンス・オブ・マウンテンヤリング」のやうな比較的新らしいものや、レスリー・ステイーヴンの「ブレイグラウンド・オブ・ユーロップ」、ヤングの「オン・ハイ・ヒルス」等が相續いて佛語に移された。

他國語から佛蘭西語に翻譯された山岳文獻は、ちよつと氣付いたものを拾ひ上げただけでも前記のやうに相當の分量に達してゐる。英語、獨逸語その他に他國語から譯されたものを求むるならばこれまたその例に乏しくない。そしてまた、これ等の翻譯された書目をみれば、一二の例外はあるとしても、過去に於て夥しく集積された山岳文獻の中で、これ等の名著の占むる地位やこれに對する評價が自らわかるやうな氣がするものである。

本邦登山界に於ても既に「山岳」岳文獻についての研究は年を逐うて盛んとなり、新刊はもとより古典も舶載せられるもの尠からず、一九三五年春本會創立三十週年記念に催された「山岳圖書展覽會」の展覧品は

主要目次

・西歐山岳文獻の翻譯

・藤 島 敏 男 一

・御 座 山 望 月 達 次 二

・故辻村伊助氏の邸跡を訪ふ 福田嘉四郎 三

・陸地測量部出版地圖目錄 四

・圖書紹介 五

・「氷・岩・ランプ」 藤 島 敏 男 五

・北大山岳部々報 6

・山路の旅 T・M 生 六

・吉澤 一郎 //

・會務報告 七

・〔附錄〕

・完登の七千米突級一覽表

・（吉澤 生）

西歐に於てきへ稀観書視される古典を殆んど網羅してゐたのである。然しこれらの古典名著の内邦譯されたものといへば甚だ数少いばかりかよく原著の意を傳へたものの極めて稀なのは頗る遺憾なことである。

原著よりも難解な翻譯や、誤譯を當然のこととするやうな翻譯はなきに若かずだが、さもなくば何といつても読みやすい自國語に西歐山岳

「山岳」第三十三年第二號

冬の小長白山 早大山岳部

・登山に於ける山と人間

——あそびを通じての登山——

の解釋——井上 幸治

伊奈川と中御所谷 吉澤 一郎

鳥甲山 中村 謙

ケラスに就いて 望月 達夫

マッターホルンの山名に就て 吉澤 一郎

文獻の名著古典の移し植えられるのを筆者は待望するものである。これらの古典は西歐に於てすら既に實際の登山に當り地理的案内としての意義を失つてゐるものが少くない。けれども之等の古典に盛られた登山家の行爲、思想は日を経るに従つてますます「耀きを増しつゝある。この意味において、私は繰返へしていふ、西歐山岳古典名著の完譯出でよ。

(一九三八・一〇)

御座山

望月 達夫

十月中旬の二日續きを利用して、以前から憧れてゐた御座山へ参りました。同行者は増山清太郎、岩崎利一の兩氏。十六日の朝、冷い雨の降る信濃川上の驛に下りたち、九時半發のバスにつて居倉の手前の小川口で下車。雨に濡れた紅葉を眺めながら、カラ傘をさして大門峠への道を登つてゆきました。峠の南側は地圖で想像するより遙かに廣々とした草原で、晴れてゐたら寝ころんで青天井でも眺めてゐたい處です。大門峠は最近通ふ人とてもなく、三川への下りなどはうっかりすると道を見失ひ勝ちです。三川の或る一軒の家でゆつくり休み、濡れ物をかはかし、折から雨も上つたので、更に北へ栗生峠を越えて上栗生へゆき、小學校の先生なる井出某氏の御宅に一夜の宿を乞ひました。三川と云ひ上栗生と云ひ何處でも行つてみたい様な、静かな、淳朴な山村です。序ながら陸測の地圖(十石峠)には栗尾とありますが、現在では栗生と書いてゐます。

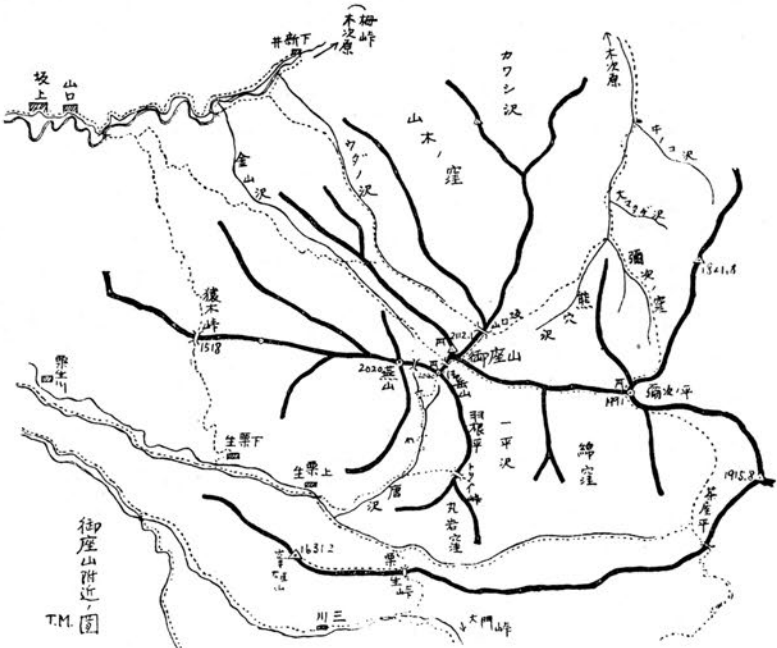
この夜から翌十七日にかけて気温はぐつと下つて、薄氷が張り、一寸餘りの霜柱がたちました。幸ひお天気も良くなつたので、喜んで井出先生の許を辭し、唐澤から御座山(御座山西南二〇四〇米峯)を経て御座

山に登りました。頂上は細長く岩を露はしてゐて、二一二・一米の三等三角點と諏訪明神の祠があります。頂近く、殊に北側は昨日の雨を宿した樹々が、厳しい寒さの爲雨木の花を咲かせて、思はぬ美觀に恵まれました。頂上には山口から案内者を連れて登つた一組がゐて、この人達は下新井へ下りました。

空は晴れてゐましたが、雲多く又雲海も高くて、一度は淺間、純白の北、蓼科、八ツ、南、秩父、西上州の山々の三百六十度の眺望を擲にしました。だが、やがて雲は遠望を遮ぎ、吾々も頂上を辭して金山澤を下り山口に出ました。途中、紅葉の中に眞白な幹の白樺が點在する高原状をなすあたり、全く素朴でした。かくして甚だ短時日ながら秋山の幸を満喫して小海に下つたのです。

殊に北相木の方面からは實に堂々たるものです。次に登路のことを少し述べてみます。

御座山の登路は勿論登山道と云へ



ら北相木川を渡つて猿木峠道を約十分程ゆき、それから左に岐れて金山澤沿ひに溯るもので、最後に御座山と御座山との鞍部に達して頂上に至るものです。猿木峠の分岐點から暫くの間は大した登りのない路、次いで白樺の點在する高原の様な處を過ぎ、ウダノ澤への道を左に見おくと、あとは一本道で金山澤の左岸をどこ迄も溯り、かなり奥で右岸にうつゝて鞍部への急な最後の登りとなります。指導標もあり、路も鞍部の直下と金山澤を渡る附近が少し不明なだけであとは大體良く路めてゐます。之は御座山への一番普通の路で山口から約三時間半とみれば充分でせう。

(B) 次には同じく北相木の下新井の少し下からウダノ澤を溯るもので、御座山の東北尾根上一九六〇米の乗越(原教氏の地圖によると「山口坂」に達し頂上に到るものと)。

(C) 同じく北相木の木次原から北相木川の源流を南に進んで、彌次平への路と岐れ熊穴澤に入つて、山口坂に登り(B)の路に合して頂上に到

るもの。(B)と(C)とは實際私が通つたのではないので正確を期し難いのですが、注意すれば大體歩き得るものと思はれます。尙(C)の路は嘗つて大島亮吉氏が登られたもの。時間(B)(C)共に三時間半位と思ひます。

(D)最後に吾々が登つた南相木村からの登路を述べます。南相木最奥の上栗生から南相木川の右岸をゆき、導かぬまゝに唐澤に入つて澤の右岸をゆきます。左手の植林はこの邊で「官公造林」と呼ばれてゐるもの。約一三六〇米附近で右へ唐澤を渡つてゆく岐れ路がありますが、之は多分トリイ峠(原氏の地圖にみゆる羽根ノ平か?)を越へて一平澤に至るものでせう。この邊までは路も明瞭です。更に進み左岸に渡つて、直ぐ又右岸にゆき、こゝに雨露を凌ぐに足る炭焼小舎がありました。再び左岸に渡り又右岸に戻り、暫くゆくと澤が二俣に分れて、水のある右俣は御岳山直下から、伏流してゐる左俣は御岳山と燕山(御岳山の西方二〇二〇米峯)の鞍部から出てゐるもので、登路は左俣に入つてゐますが、此の附近は甚だ不明瞭です。十分位で一寸した瀧がありそこに石佛が二基置かれてあります。瀧に向つて右手に登り、御岳山から南下せる小尾根に達してほど稜線上を眞北に登り處々岩場を経て御岳山に達するもので、傾斜はかなり急です。御岳山からは(A)に記した御岳山との鞍

部に一旦下りて頂上に至るのです。この道は距離は一番短いのですが、急な爲上栗生から矢張り三時間は要します。

最後に御座山に就いて從來書かれたものゝことを一寸記してをきますが、之は餘り多くないやうです。古くは大島氏の記せる「小倉山」「山岳」第二十年第一號の一文があります。この中に述べられてゐる御座山附近の林道は今日でも大體歩き得るものと思ひます。又原全教氏の「奥秩父、續篇」中には此の附近の山々のことが屢々出てきますが、御座山に登つたと云ふ記事はなく、その代り御座山附近の概念圖が挿入されてゐます(五六四頁)。最近では中村謙氏の近著「上信境の山々」中に御座山の一項を設けて適當な説明が加へられ、又それによると雑誌「山小屋」第五六號にもこの山の記述がある由です。

雲面鏡の如し

スキーの季節も近づきました、去年の年鑑道省で〇温泉にスキーの適否につき照會した所「氣候温暖にして雪面鏡の如くスキーに最適」といふ返事が來た相です。山小屋のストーヴを囲んでの馬鹿話の種にはなりませう。旅客課の河上氏から聞いた話であります。



故辻村伊助氏の邸跡を訪ふ

福田嘉四郎

昭和十三年四月二十四日

箱根湯本の温泉町から須雲川を渡り、雨あがりの濡れた小砂利の急坂を登つて早雲寺の境内から山門を抜けて箱根舊街道に出た。

この山門の邊りも、今では周りが餘りに俗化して了つたので暫らくも留つてみてゐる氣も起らない。仍て直ぐ左折し、街道を三枚橋の方へ少し下ると右手の山側に「石垣山登山口」と記された白ペンキ塗りの杭が建てられてあり、五、六歩で月山神社といふお社の石の鳥居の前へ出る。ここまで来ると、左手が新しく建てられた湯本小學校で、舊街道を隔てゝ竹林の粗雑に生へあがつた稍や急な小山を前にして廣い校庭に露立つた朝の光りを一杯に受けてキラキラしてゐた。

だら／＼と尙も坂を下り、丁度小學校の正門の前の所から反對側の石垣を乗り越して、街道の上に一メートル程昇ると、そこが宿の女中の教へて呉れた辻村さんの屋敷跡なのである。

「震災の儘になつてをりますが、まだ少し許り庭らしいところが残つてをります。」と云つた言葉に従つてその庭らしいのを探したのである。

小學校に脊を向けると反對の小山に眼が向く。街道に沿ふて間口約四五十米もあるだらうか、奥行はちよつと計り知れないが屋敷は何千坪とかいふ話であるから或ひは山の頂近くまでが含まれるのかも知れぬ。

山崩れの跡とはどれか、とまづ思はず眼をその山の頂にやると、なるほどそれと思はれるやうな所がある。

赤味がかった山崩れの跡が、僅かに露出してゐて、最早大部分は小笹と雑木の若葉に蔽はれてはゐるが、最初の全體としての地形の感じは、少し誇張して云へば、穂高の潤澤に立つて一方の壁を眺めたのと同じ様な感じがした。あの岩山に青草をあしらつたら、と思はれるやうな地形である。

松の生へた山の頂の所から崩れかけて、山腹の上部をカール状に切り取つてゐる。今でこそあの震災から十數年経ち、色々な雑木が生へてはゐるが、山崩れ當時の赤肌は想像以上凄絶なものであつたに相違ない。

庭の跡といふのは三枚橋寄りの屋敷の一角に残つてをり、廣さを云つたら百坪もあらうか。その内に一本の柿の木が若葉が朝日に輝きさわさわと揺れてゐた。

庭の隅の街道に沿ふた部分に、ヒマラヤ杉とキンヒバとを並べて植へたらしいのが六、七本残つてをり、今ヒマラヤ杉は三、四米位の高さになつてゐるから家を建てられた時分は苗木であつたのかも知れない。

當時の手にかけられたもので、そのまま残つてゐるものとしては、この植木丈けらしい。徑と思はれる小徑も當時のものとは思はれず、當時のものは己に消えて、今あるものはその後土地の者達によつて自然につけられた踏跡でもあらう。

屋敷の左手のさうした徑を採つてすこし登つて行くと、四邊にシヤガの花が咲いてをり、可成り大きな灌木が蔽ひ被さつてゐるうす暗い山に這入つて來て了つた。このあたりまでが屋敷であつたのかも知れないが透して明る小田原の方面を覗くと隣りは直に密柑畑になつてゐて、畑の手入れでもしてゐるのであらうか女が二、三人立ち働いてゐる姿が見える。鶯が頻りにあちこちで啼き次いでゐる。水蒸氣を含んだ朝の光りは蒸し暑く初夏を思はせる程であつた。

昔を偲ぶ、せめてロツク・ガーデンの一部なりとも残つては居ないものかと、素足を朝露に濡らし乍ら、

あたりを歩き廻つてみたが、それらしいものはない。栽培してをられた高山植物の一ツ位は或ひは残されてゐるかも知れぬとそんな儚ない希望など抱いてみたが勿論そのやうなものゝあらう筈はないのである。

大きな、およそ何千疋もあらうかと思はれる岩石があたりこちに轉つてはゐるが、唯岩石のみでこれがもとからここにあつたものなのか、或ひは山崩れと同時に上部の土中から轉落して來て留つてゐるものなのかは知る由もない。

「會報」合本の件

本會々報（一號—五十號）の合本がまだ三部残つて居ります、御希望者は至急御申出下さい
賞費三圓五十錢 送料別

それらしい僅かな踏跡を追つて、それらの岩石を這つたり、岩石と岩石との間をよるけながら登つてゐるうちに、僅か許りの岩場の感觸が湧いて來たりした。そして小徑らしいのを向も登つて行くと、石を切り出した跡や、竹をきつて枝を拂つたの杯が、何箇所も枯れ葉の儘捨てられてある。石を切り出せば切り出し放し、竹を切れば切り放した儘残りの不用の部分はその儘捨てつ放しにされてゐる。恐らく小田原の御本家では、あの跡に手を入れるに忍びず其儘にされてゐるのもあらうが土地の者はその心持ちを知らずに屋

敷跡から必要な物丈を探つて行く！。立ち止つてそんな事を考へてゐると、またしても驚きはあちこちで頻りに啼いてゐるのである。

いい加減登つて、もう少しで山崩れの最初の部分の下に届く所まで登り、先はもう徑もなく餘りブツシエがひどいのでそこから引返すことにした。

汗ばんだ身體に胸を開いて風を入れ乍ら登つて來た方を振り向くと、可成り街道からは上つて來てをり、明星ヶ嶽の背面に當る所の思ひがけぬ地點に、眞白な富士がいつの間にか八合目位より上をくつきりと現はしてゐた。餘り突然でもあつたし、又、全く思ひがけなかつたことだつたので、吃驚して暫らく眺めてゐた

それからどれ程の時が経つたらうか。ふと、氣がつくと、時々登山車の警笛や、下の舊街道を走るバスのエンヂンの響が耳に入つて來た。寂しい、シーンとした氣持ちである。宿の下駄の鼻緒が足にきつい爲めに、親指の付け根の所が馬鹿に痛いと思つてゐたら、その所の皮が剥けて赤い肌を現はしてをり、それに露が沁みて逆も痛む。

下まで降り、残り惜しいやうな氣がして、残つてゐる庭の所から今一度山崩れした頂の方を眺めた。

邸宅はどの邊にあつたのか知らないが、若しいま見て想像される崩れ初めたとした所から土砂が流れ出た

としたら、向ひの學校の方へは流れずに、いつたんはその方に向つたとしても、地形上右に自然に逸れて街道に沿つて三板橋の方向にコースを採るべきものと思はるゝに拘らず、その方向の庭だけがそのまゝに残されてゐるといふのは不思議である。

然し何れにあつたとしても山崩れのコースの中に捲き込れる運命にあつたことは、地形から察して已むを得ない。唯ここに住居を定められたことも運命であるし、山崩れが発生したこともそれと同じ意味で片付けるより仕方がない。

辻村さんとしても定めし山津波の事は考へて居られなかつたであらう唯生前夫人ローザが、そのことをちよつと氣にしてをられたと云はれるが、そこにたゞ一つ、何か知ら神祕なものを感ずる許りである。

辻村さんは山津波の爲めに一家諸共、家と共に一瞬の間に土砂と岩石とに埋まれて押し流されたものであり、それこそ「アツ」と云つた瞬間の出來事であつたに相違ないと想像されるが何といつても運命であるといふよりほか云ひやうがない。人の運命程計り知れぬものはあるまい。

「アルプの嶺に、アヴァランシユを踏んで、千仞の谷に這り込む氣であつたに相違ない、是は痛快だと、心に叫んで、ローザと共に、手とりかき抱き、そのまゝ一瀉數十丈を走つたものと思はれます、」

と、小鳥さんの書かれたものに、令兄の言葉として載つてゐるが、日本人の「あきらめ」といふものは現世の我々に餘りに峻厳すぎる。

令兄のお話しのやうに或ひは痛快だと思はれたかも知れないが、僕には辻村さんはまだ死にたくはないと叫ばれたとして置きたい氣持が一杯である。勿論諸念といふものから離れての話である。その意味は、辻村さんにはもつともつと生きてゐて欲しかつたし、辻村さん自身としてもまだまだ爲すべき仕事があるからであらうし、また生きられることが辻村さん一家にとつて一層幸福だと思ふからである。が、こんな付度は宥されぬものだらうか。

「夏草徒らに深くして……」といふやうな古人の言がある。芭蕉の句や、牧水の歌にあるやうに、實にすべては「……夢の跡」であり、また「……ほろびしものはみな懐しき」である。

僕は生前辻村さんとは一面識もなかつたが、なぜかあの一生に對しては妙に心惹かれてゐたひとりである此所を訪れる機會のあつたのも何かの縁でともあらうかと思ふのである僕はそれらを思つて、しばし徘徊去るに忍びない思ひをした。そしてこの句や歌をよんだ人の氣持が、いまひしひしと胸に迫るのを覺えるのである。

陸地測量部出版地圖目錄

昭和十三年二月二十八日出版

二萬五千分一地形圖	修正	津近傍	四號	白	子	一面
四日市近傍	七號	菰	野	一面		
五萬分一地形圖	新版	横須賀	五號	極樂寺	一面	
和歌山	十五號	山	東	一面		
高	雄	六號	大樹林山	一面		
同	七號	枋	山	一面		
五萬分一地形圖	修正	長	野	十四號	坂	城
臺	南	十一號	旗	山	一面	
同	十五號	臺南南部	一面			
五萬分一朝鮮地形圖	修正	羅	南	五號	章興洞	一面
慶	州	十二號	長生浦	一面		
同	十六號	梁	山	一面		
二十萬分一帝國圖	修正	臺	南	一面		
二百萬分一大日本輿地圖(邦文)	修正	同				
百萬分一滿洲國輿地圖(四枚一組)	(歐文)	同				
計	十六面	以上				
×	×	×				

前號にて本年三月からの分を發表致しましたが、その後追加として右二月發行分を「陸軍」の方から御通知戴きました。



圖書紹介

ジャン・コスト

氷・岩・ランブ

高須 茂 譯
昭和 十年
朋文堂 發行

原著者コストのものは嘗て筆者も抄譯を試みたことがあるので、妙からぬ興味を以つてこの譯書を手にした。

開卷第一頁から先づ、ペルベエなどといふ不可解な山名に遭遇して度膽を抜かれる。誤植かとも思つたが、五三頁にも同じ山名が出て来るのでさうでもない。Pelouxと綴つてペルベエとは、本書のあとがきに譯者が『地名や人名はどう讀んだらいいか判らないところが多く、かなり無理があるだらうと思つてゐます』と断り書きがしてあつても少々非道い

茲にあとがきを持ち出したから序

にいま少し引用しやう、曰く『二三の著述の間に譯筆をとつたためと語學的な缺陷とで、誤譯に至つては、水の中に水素があるやうに在るでせう』と、つまり水素なくして水は存在しないのだから、この譯書にとつて誤譯は必要な構成分子だといふことになる。續いて曰く『譯文は追字譯を避けてなるべく判りやすいやうに意譯とした箇所が多く』はまあ我慢するとしても『どうしても見當のつかぬところはグリセードでも飛ばすやうに一氣呵勢にやつつてしまふ』に至つては、啞然として余は言ふところを知らないのである。

余がこの譯書と同じ原本「*Alpiniste*」の第一部（本書三頁乃至四四頁に當る部分）を譯したものは昭和七年發行の山岳雜誌「登山とスキー」第九號及第十號に「若き登山者の言葉」なる題名の下に掲載されてゐる。いまこれを取り出してみると、原本の順序と異つてゐる箇所があり、恐らく編輯者の都合からであらう削除された部分も妙くないそれに譯文そのものも不完全ではあるが、高須氏の譯文と照合してみた。高須氏は勿論余の抄譯のあることなどは氣付かなかつたに違ひないが中には偶然の一致が殆んど同じ譯文もあるし、また中には全く異つた意味に譯出された文もある。後者に就いては原本に據つて再吟味をしてみた。

既に譯者が前記のやうに誤譯があ

るのは當然といふより、寧ろ誤譯なくしてこの譯書は成り立ち得ないのだと言明してゐられる以上、之を指摘するのは無用の業であるが、そのまゝ見逃すことが原著者並びに讀者に對して不親切であると信するが故に、次に二三の實例を挙げやう。

「私はパーティーが不幸の最中にあることを知つた。彼等の顔に『死』が現はれてゐたから。しかし、私はその『死』の靈感を、重々しい、そしてつと高い欲望と置き換へようと思つた」（本書一三頁）とは一體何を意味するのか判斷に苦しむ。この部分に續く譯文も、原文の言はんとするところを全く取り違へてあるが要するに、非常に困難な登攀を成し遂げたパーティーの内、本當にその危険を知つてゐたのは自分だけ以外の連中はそれほどのものだったと知らず唯成功に有頂天になつてゐると、嘆いてゐるのだ。右の部分は

「仲間たちの溢れるばかりな快活さをよそに、私は死に直面したときに感ずる嚴肅さに襲はるゝのを否むことが出来なかつた」とでも譯したい。「どこの北壁でも早晩に取付くのが最も得策である、さうすれば生々しい氷や新雪でなく、舊るい凍つた雪をそこに見出し得る」といふ一節は「嚴冬の北壁はまつたく素敵である。そこには借り物でない雪と氷ばかりがある。まやかしの雪や氷など

はてんで無いのである」（三三頁）となつてゐるが、かうなると續譯では

ない、全くの創作である。

第一部にもまだ一摘記したい箇所は妙くないが右の二例に止めて第二部に移る。この部分になると、譯者の所謂水の中の水素、即ち誤譯は益々猛威を逞しくしてゐる。之を一々指摘するとすれば、第二部の大部分をこゝに譯出するの必要が生ずるかも知れないから顯著なる例を挙げやう。

「最も急峻な絶壁との闘ひに、男子の本領である冷静と自己に對する信頼とを傾け盡さんがため、案内者なしにたゞ一人で山を攻撃するのだ」といふのが「單獨で、サン・ギイドの登攀だつたが、眞つすぐに削ぎ落された壁が、その壁は一人の人間を護るに充分であると彼に信じ込ませたのであるが、その壁が彼を押し潰した」（四九頁）と譯されてゐる。

「僕は君にギド・レイのアルビニズム・アクロバティクを購ふやうに薦める。大きな登攀に對する精神的準備として、これ以上のものはない、それはアルビニズムに於て『信仰生活への手引』（筆者註、この本は聖フランソワ・ド・サールの著）に當るものである、丁度マムメリーのアルプス及コーカサス登攀記が『イミテーション・オブ・ヂーザス・クライスト』に當るやうに。」といふ文は「僕は君にギド・レイのアルビニズム・アクロバティクを購ふやうに薦める。この本には登攀に役立つやうなことは何一つ書かれてゐない。唯、

敬虔な山岳生活が繰りひろげられてゐるばかりだ。それはマムメリーのアルプス及びコーカサス登攀記に似てゐる（五三頁）」となつてゐる。ギド・レイ、マムメリーの遺著が登攀に無益の本とは大した誤解、それに『信仰生活への手引』なる書名をグリセードの如くすつ飛ばし、イミテーションを『似てゐる』と輕く片付けたお手際、感嘆の外はない。

「金曜日に、佛蘭西山岳會でマッターホルンに就ての大層面白い講演があつた。見事な幻燈。……」は「金曜日に、セルバンでC・A・Fの氣持のいい講演會があつた。盛會だつたとも。……（六一頁）」と譯され、マッターホルンの佛蘭西名セルバンは恰も喫茶店の店名の如く扱はれ、プロジェクトンは盛會といふ飛んでもない意味を頂戴してゐる。追字譯をさせて判りやすい意譯といふのがこんなものならば、われまた何をか言はんやである。六十五頁の「エヴレストのラバンドン・ド・ブルースは英國人にとつて、地域的に都合が悪い。だが決行して決行できないことはあるまい。……」は書中の白眉ともいふべきもの、誤譯もこゝまでくると愛嬌がある。「ブルースがエヴレストを抛棄したことは英國人にとつて一つの痛手である、しかしそれが登頂を妨げることはあるまい」といふ原文なのである。抛棄（abandon）といふ言葉が、ブルース將軍の名と結び付いて、地名とも

何とも得體の知れぬものに化してゐる。こゝに至つて余はこの譯書をこれ以上讀み續けるのを抛棄した。

唯終はりに一言附加したい。外國語の翻譯を試みるに當つては充分な用意があるべきである。冒頭に引用したやうな無責任な態度で筆をとるべきではない。見當違ひの誤譯をするのは原著者に對する大なる冒瀆でなくしてなんであらう。また一面からみれば讀者を見くびつてゐるとも言へやう。尤も本書刊行後どこから何の文句も出ないのに勢ひを得た譯者が、本書の第二版(?)を本年刊行するに當つて、例の「あとがき」を全部削除して平然としてゐられるやうな讀者では、みくびられても仕方がない。翻譯者の自覺と讀者の向上が達成されない限り本書のやうなおそるべき誤譯書は、あとを絶つまい。

(一九三八・九・二〇 藤島敏男)

北大山岳部々報 6

十三年九月一日 北大山岳部發行 菊判二五七頁 地圖四葉
本號は昭和十年十一月から本年四月に至る二ヶ年半の北大山岳部の活動を経たもので、前號通り良心的な編輯振りである。

先づ第一に部員七人で執筆した嚴冬のベテガリ岳の記事が目につく内容にまへがき、準備、経過、冬期露營用品、食料、氣象等に分かれて

あるが、何分にも登頂迄に至らぬもので部員諸氏の努力はみとめらるゝにしても、非常に物足りぬ感をいだかせる。器具、裝備の點にもそれ程新らしいものは認められないが、只「冬期露營の衛生について」の短い一節はこの方面が比較的未開拓な領域だけに有意義な研究であり、今後の御検討を期待する。次に冬の南日高連峰と題して、「豊似川よりピリカヌプリ山へ」「一月の神威岳」、更に「忠別川湖行」と「ヤオロマツプ川湖行」の二文章がある。石橋恭一郎氏記する「忠別川湖行」の一文は簡潔な表現の中に一人未知の溪谷を満る者の氣持を述べて餘す處がない。九ボ二段組は「新らしき山旅より」と題され八篇の短文があり、又その他に冬期合宿覺書が添へられてゐる。追悼は和辻廣樹、伊藤周一兩氏について。年報は地方別になつてゐるが、この方法は一年度に於ける部の活動を全體的にながめるに不便があり、矢張り年度別にして索引をつけたものが良いのではなからうか。寫眞(十三葉)は中々良いものがあるが、前のものに比べると少し印刷が悪い。

(T・M)

山路の旅

田部 重治著
新潮社發行
二七五頁
定價壹圓廿錢

田部さんの本は暇り遠慮なくいふと物足りない、出る度に不思議に私は田部さんの本を買ふ、物足りないけれども何處か私には共鳴出来る點があるからなのであらう。物足りないといふのは書いてある事が愈々奥さくてガサ／＼山へ登つてゐる者には老人の發言位にしか響かないからだ事實日本人は餘りに早く老若れ過ぎる。峠や高原を彷徨ふのもいゝが外國人殊に西歐の人達は實に元氣である。此の間帝國ホテルで私が會つた伊太利のギリオネ氏杯は日本流に數へると五十一才で七二五〇米突のゴールデン・スローンに登つてゐる。之から觀ると田部さん杯はもつともつと元氣があつていゝと思ふ。まだまだ宿場の本陣に感心してゐる年配ではないと思ふ。尤も慙ふは云つても之は年の上の事だけの話で、身體の條件や環境がそれに適つてゐないのなら止むを得ない、田部さんが假りに劍の西壁でも登つてゐる事を吾々が想像出来たらどんなに嬉しいだろう、又どんなに愉快だろう、さうなれば日本山岳會だつて今頃何をしてゐるんだか譯がわからないと、人から兎や角云はれる事もなかつたろうにと思ふと、實際惜しい様な氣もする。が今更そんな世迷ひ事をつぶやいたつて何もならない。問題は吾々に残されてゐるのだ。排他的な、鼻もちのならないブチ・ブル氣分やお坊ちゃん氣分をサラリと棄てゝ、どん／＼街頭に出て「山」そのものの

爲めに働く事だ。これは何も日本山岳會のみの問題ではない、日本中の山岳會の總ての上に課された、やり甲斐のある課題であるのだ。扱てこんな事を云つてゐたのではいつまで経つても圖書紹介にはなりさうもないので此の邊で切り上げ本題に還らう。

私は一番先に「共鳴出来る點がある」と云つた、それは詰り私達がどうしても山へ登れなくなつた時分に、落着くべき安住の地を、田部さんはよく説明してゐて下さるといふその點であるのだ。田部さんは「山とロマンティックな精神」といふ標題の許によくこの事を書かれてゐる、結局、吾々は「好きだから登つてゐる」といふだけでは本當に山に登つてゐるのではないのかも知れない、田部さんのいふ様に山に詩を、而も汎ゆる意味に於ける詩を見出す人間でなければならぬのかも知れない。A.ルンゼを横切つて第三尾根にとつづくのもいゝ、體力や度胸のある人間ならどし／＼やるべきだ、だがそれだけでは輕業師と何等選ぶ所がない、青年のその無我の境に於ても尙且つ詩を求めてゐるのが田部さんの根本思想ではないかと思ふ。

今年の二月田部さんは角田氏と二人で私達の會(針葉樹會)に御出でになつた事がある。その席で、「ウインパーはあれ程山へ登つてゐるのに少しも深い所がない、西洋人はどんな低い山へ登るにも「アタック」といふ文字を使ふ、西洋人といふものは決して自然に同化出来ない人種であるらしい」といふ様な意味の事を云はれた事がある。攻撃精神も勿論必要であらうが徒らにそれ許りに捉はれてゐていゝ答のものではない、幸ひ吾々は日本人であつて自然の何たるかを心得てゐる、自然に同化するの素質を持つてゐる。之を活かさなければならぬのだ。山に同化するといふ事はとりもなほさず山に詩を見出す事と同じ意味なのである。日本の山に行詰りを感じて只管に高きを、險しきのみ求めんとする青年登山家達よ、日本の代表的靜觀主義者の一人たる田部さんの、この言葉を味ふだけの心に餘裕の持合せありや。

最後に、序文に勿論斷り書がしてあるのであるが、すつと通讀して行くとも同じ時の旅の事があちらにもこちらにも出て来る。著者自身は別の時に書かれ讀む方もその時々で異つた方面の人々が讀むのでいゝ事になるのかも知れないが、慙ふいふ風に一冊に纏められると重複といふ事はどうも困る様な氣がする。文章が新緑や青葉を聯想させる様な綺麗なものであつても、讀む方は又かと思はす溜息をつかせられる。どうせ出されるなら、もう少し整理したらと思はざるを得ない。

(吉澤 一郎)



會務報告

十月定例理事會

十月十三日 午後六時半虎ノ門本會事務所にて開催

出席者 武田、島山、藤島、冠、茨木、黒田、吉澤、加藤、石原、高橋、野口、角田、島田、中司

一、「山岳」本年度第二號編輯報告の件

一、事務分擔の件 野口理事に圖書係依頼決定

一、會費滞納者督促入金狀應報告の件 請求後拂込ありたる分一四二口、金額八百五十二圓(十月十二日迄)右は請求總額の大約三分の一、請求人員の四分の一に當る

一、「山岳」バックナンバー頒賣の件 十月十二日迄豫約を含み約七〇〇冊

一、伊太利登山家ギリオネ氏(一九三四年ディレンフルト遠征隊に参加ゴルデン・スローン及びクッキー・メリービークに初登頂す)の件 北アルプス案内人として上條孫人を吉澤氏より依頼したる由、同氏と

有志晩餐會を共にする件吉澤氏に交渉依頼す

一、厚生協會大會準備委員選任の件(厚生協會より右委員一名を日本山岳會より選出ありたき旨申出ありたる分)冠評議員に依頼する事に決定す

一、鐵道省河上氏との交渉經過報告 吉澤氏説明す

一、新任理事詮考の件 本年にて角田、茨木、島田、中屋、今西の五氏任期満了、並に早川義郎氏一身上の都合より辭任申出でありたるに付新任及補充理事(二年間)の詮衡を爲す

一、社團法人設立の件 來月の總會に再提案の事

一、新入會員詮衡の件

以上(中司)

關西支部來室者報告

月別	會員	會員外	議 會		計
			回数	人員	
8 月	52	40	5	72	164
9 月	45	38	4	57	140

集合利用登山團體は學聯、エーデルワイス及び山の集の三回なり。

新着圖書

因伯民談	五ノ三	鳥取郷土會
岩雪崩	八一號	I M C 山岳會
東京市山岳部報	十月	東京市役所
みなかみ	一一九號	同 會
京都山岳	十月號	同 會
G・R・K	十月號	がくれい會
地學雜誌	十月號	東京地學協會
峯嶺	十號	同 會
臺灣山岳叢報	十號	臺灣山岳會
八幡製鐵所山岳會々報	第四號	同 會
山小屋俱樂部々報	十月	同 會
みなかみ	十月號	奈良山岳會
山嶺	七號	東京野歩路會

寄贈圖書

箱根の植物	澤田武太郎述	中司文夫氏
故永守龍一郎氏追悼號(兩神山遺難報告)		頂山岳會殿
山の魂	石一郎譯	黒田孝雄氏
山をめぐる行爲と夢想		荒井道太郎譯
六甲	朋文堂刊	吉澤一郎氏
"Schweizer Bergführer erzählen"		田口一郎氏

挿繪の説明

第三頁所載のカット胸草は會員、中村清太郎氏筆のものであります。

◇編輯室より◇

今度は附録として昨年までに完登された七千米突以上の山及びそれに關係ある手帳を一つの表として會員諸氏の御年許に御届けしました。中央を明けたことは綴込みの都合を考へたからであります。御参考になれば幸いです。立教の人達の登つたナンド・コットは日本人の業績としては素晴らしいのですが、六八六七米突なので惜しいけれども載せませんでした、御了承下さい。

その裡にアラスカやアフリカ、コーサス等の開拓史も一覽表にして見たらと思つてゐますが、賛成者が少ければやめまします。

會報投稿規定

◇山岳に關するものなら何でも結構です。

◇會員外にても投稿自由。

◇締切毎月五日頃。但しその月に出るか出ないかはわかりません。

◇用紙は自由なれど十六字詰。

昭和十三年十一月十五日印刷
昭和十三年十一月十六日發行

東京市大森區堤方町六一五
發行兼編輯者 吉澤一郎
東京市芝區平町(不二屋ビル)
發行所 日本山岳會
電話(芝區)四三二六四九
振替東京四八二九
東京市芝區松町(丁目十三番地)
印刷者 植田庄助
印刷所 成文堂印刷所

美津濃⁹ スキー用品 売出中



冬の體位向上——寒氣を衝いて、銃後の鍛鍊に絶好のスポーツ、スキーのシーズンが参りました。

新雪への御用意は——亞歐最大の製造量を持つた完備せる工場より常に科學に立脚し、合理的製法に依つて造り出された美津濃スキーは、既に斯界最高の權威を認められ、世界的優秀性を誇るもので、本年も是非定評ある美津濃スキー用品の御使用を御奨め致します。

神 田
小 川 町

美 津 濃

銀 座
五 丁 目

完 登 ノ 七 千 米 突 級

— „Die erstiegenen Siebentausesender“ —

順番	年代	月 日	山 名	海拔 m	所 在 地	初 登 頂 者	記 事
1	1851	年 初	Shilla	7026	ザスカール・ヒマラヤ	土地ノ測量助手(姓名不明)	頂上=一本ノ支柱ヲ置ク
2	1897	1月14日	Aconcagua	7035	南 米・アンデス	Matthias Zurbriggen	ガイP。Horconestalヨリ登頂ス 以後40年間=12回ノ登山ガ行ハレテキル (内2回ハ獨逸人)
3	1907	6月12日	Trisul	7120	ガルワール・ヒマラヤ	T. G. Longstaff A. Brocherel H. Brocherel Karbir	A. B. 及 H. B. ハガイP, K ハ“ガルガ” 5300mノ幕營地ヨリ10時間=シテ達ス 第二登頂ハ1933年6月21日 P. R. Oliver 及 Kesar Singh =ヨリテ行ハレタリ
4	1911	6月18日	Pashunuri	7065	シッキム・ヒマラヤ	A. M. Kellas	人夫2名ヲ伴フ 6100mノ幕營地ヨリ登頂ス
5	1913	8月3日	Kun	7077	カシミール・ヒマラヤ	M. Piacenza L. Borelli G. Gaspard	G. G. ハガイP, 人夫2名ヲ伴フ 6350mノ幕營地ヨリ登頂ス
6	1928	9月25日	Pik Lenin (前名Pik Kaufmann)	7127	ロシア・アラウ	E. Allwein E. Schneider K. Wien	Sauk-Sai 米河ヲ出デ5820mノ幕營地ヨリ7 時間=シテ登頂ス 第二登頂ハ1934年9月8日 V. Abolakov, Lukin 及 Tschernuka =ヨリテ行ハル
7	1930	5月24日	Napal Peak	7153	シッキム・ヒマラヤ	E. Schneider	ネパール・ギヤツツゾヨリ登頂ス 第二登頂ハ1936年9月10日 A. Göttnner, K. Wien =ヨリテ行ハル
8	1930	6月3日	Jongsong Peak	7459	シッキム・ヒマラヤ	H. Hoerlin E. Schneider	マツターホルンノ瑞西山稜ノ如キ1200mノ 北山稜ヲ1日ニテ登降ス 第二登頂ハ引續キ6月10日 F. Smythe, U. Wieland, M. Kurz 人夫1名及ビ G. O. Dyrenfurth, Lewa 等=ヨリテ行ハル
9	1930	6月10日	Dodang Nyima P.	7150	シッキム・ヒマラヤ	H. Hoerlin E. Schneider	東山稜ヨリ登頂ス
10	1931	6月21日	Kanet	7756	ガルワール・ヒマラヤ	Lewa K. L. Holdsworth E. Shipson F. Smythe	Lewa 人夫頭 北山稜ノ東側7100mノ幕營地ヨリ登頂ス 第二登頂ハ同ジク6月23日 Birtle, Greene 及 Kesar Singh =ヨリテ行ハル

完登の七千米突級解説

吉澤 一郎

此の一覽表及解説は Fritz Schmitt の近著 „Der Bergsteiger von heute“ にあるのに多少の訂正及追加を施したものである。本年度の『山日記』には完登された7000m級として22座を擧げてある(×がつけてある)が實際は24座としていふ。その内68の“Domo Peak”は×が附してあるが疑問らしいので省いた。Schmitt の文中にも之は載つてゐない。又64の“Chomo Ihari”は表にもある通り5月21日に完登されてゐるので×が必要だと思ふ。

此等の24座の他にも完登されたと思しきものが少しある、然し其等に就ては確證なく且つ疑問とすべき節もあるので省略した。次のものがそれである。

- (1) E 61 或は Mustagh (7282m, クエンルン) Johnson, 1865?
- (2) Kangchendzönga 東北支稜頂 (7700m) Hartmann, Wien, 1931.
- (3) K 36 南峰 (7460m) Waller, Brotherhood, Hunt, 1935.
- (4) Queen Mary Peak 側峰, 國際ヒマラヤ遠征隊, 1934.

左記完登の24峰を區域別にする

ヒマラヤ	17
カラコラム	2
アラウ・バミール	2
天山山脈	1
大雪山脈	1
アンデス	1

地方別では

亞 細 亞	23
南 米	1

一時間平均如何程の登攀を行つてゐるかと思ふと、勿論種々の條件で異なるが數例を擧げれば次

11	?	?	Khan Tengri	約7000	天山脈	Progrebezkii F. Saubere B. Turin	第一登頂ナル者ヲ確證ナシ 第二登頂ハ1936年9月5日 I. Saladin, E. 及 V. Abolakov, Dadionov 及 Gutman = ヨリ テ行ハル
12	1932	6月16日	Rakiet Peak	7060	パンジヤ・ヒマラヤ	P. Aschenbrenner H. Kunigk	北山稜ヨリ登頂ス 第二登頂ハ1934年7月8日 P. Aschenbrenner, E. Schneider = ヨリ Nanga Parbat 攻撃ノ際 遂行ハル
13	1932	10月28日	Minya Gongkar	7587	大雪山脈	R. L. Burdall T. Moore	支那最高ノ山 6500mノ幕营地ヨリ 11時間ニシテ達ス
14	1933	9月3日	Pik Stalin (前名Garmo)	7495	パミール	E. M. Abolakov N. P. Gorbunov	ソ聯最高ノ山 6900mノ幕营地ヨリ東面ヲ攻撃8時間ニテ達ス
15	1934	8月3日	Golden-Throne 東峯	7250	カラコルム	J. Beliaief P. Ghiglione A. Roch	6700mノ幕营地ヨリ登頂ス P. G. ハ去ル9月來朝總高ニ登ル
16	1934	8月12日	Queen Mary Peak	7422	カラコルム	H. Ertl A. Höcht	6800mノ幕营地ヨリ南壁ヲ登リ14時間ヲ費ス 主峰ノ他(西, 中央, 東峰)モ其ノ時登頂ヲナス
17	1935	7月	Kartaphu	7221	ネパール・ヒマラヤ	E. Kempton Ch. Warren Shipton	エヴェレスト偵察行ノ途路登頂ス
18	1935	7月	Kelias Rock Peak	7065	ネパール・ヒマラヤ	E. Shipton Tilman Wigram	"
19	1935	8月29日	Kharta Changri	7032	ネパール・ヒマラヤ	E. Kempton Ch. Warren	"
20	1935	11月18日	Kabru	7316	シッキム・ヒマラヤ	C. R. Cooke	6820mノ幕营地ヲ出テ南方ヨリ北峰ニ登頂ス
21	1936	8月29日	Nanda Devi	7817	ガルワール・ヒマラヤ	Odell Tilman	英國領土内ノ最高ノ山 現在ニ於テ完登セラレシ最高ノ山 7300mノ幕营地ヨリ登頂ス
22	1937	5月21日	Chomolhari	7294	アッサム・ヒマラヤ	F. S. Chapman Pasang (人夫)	6300mノ幕营地ヨリ登頂ス
23	1937	8月11日	Mana Peak	7273	ガルワール・ヒマラヤ	F. Smythe	約6000mノ幕营地ヨリ Oliver ト共ニ出發西北 稜ヲ試ミタルモ不可能ナルヲ知り南稜ヨリ登 頂ス Oliver ハ途中ニテ前道ヲ斷念ス
24	1937	11月7日	Nepal Peak 南西峰	7145	シッキム・ヒマラヤ	J. Hunt	C. R. Cooke 同行セルモ調子悪キタメ途中ニ テ斷念, 最高幕营地ハ約6600m

の如くなる。

Pik Lenin 180m
Pik Stalin 75m
Q. Mary Peak 65m
Trisul (Oliver と Kesar Singh) 200m

世界に登山家・案内者・人夫の数は計り知れぬ程居るが、今日までに此等の7000m級の山々に踏込み頂上を獲得したものは漸く80人に過ぎない。最も多いのは英國人、次が獨逸人、續いて伊太利人、露西亞人といふ順序になつてゐる。

次に登頂の峰数を個人別に見ると

6峰を征服せる者 Erwin Schneider
3 " " Shipton
2 " " Wien, Hoertlin, Smythe,
Tilman, Warren, Kempton, V 及 E. M. Abolakov,
P. Ghiglione, 人夫頭 Lewa, 及 Kaser Singh, ガ
イフでは Zurbriggen, Lanti, A. 及 H. Brocherel,
G. Gaspard.

大部分の登山は山案内者を伴はず。

完登7000m級の初登頂に際しては人命を犠牲となせるもの唯一つ(Pik Stalin, 但しアモソカグアでは後若干の人命を失つてゐる。それでも8000m級の攻撃に比較すると犠牲件数は非常に少い。之等最高級の山々は一つとして完登せられて居るにも拘らず計10回の攻撃に於て登山家、人夫合せて47人が斃れてゐる。

Nanga Parbat 29
Mt. Everest 10
Kangchendzonga 8

憧れの目標であり而も運命の安住の地であつた此の世界の秀峰の上に永遠に輝く彼等犠牲者こそは世界登山史上に於て最も貴重な存在である。乍併7000m級の山々と雖も吾々若き登山者にとつては、侮れたる課題に溢れ而も最高の高所への前提としての新しい活躍の舞臺でなければならぬ。

× × ×

まだ説明の不十分な所や不満足な點が多少(一々の登攀に對する参考文獻)あるが執れ機會を見て改訂増補をして行き度い。現に角一應「表」があれば何をするにも樂だらうと思つてやつた仕事である。御氣付の點御叱正さらば幸甚。

